

次いで第三の問題点は、軍政期の隣組を研究する最大の今日の意味は何かという問いに答えていないことである。それは、隣組制度が、スハルトの開発独裁期に復活・強化され、民主化後の現在も延々と続いて、住民管理という点で重要な役割を果たしている、ということにあるのではないだろうか。つまり隣組やジャワ奉公会などの日本時代の統治システムは、1970年代に、権威主義体制を確立しつつあったスハルトが、基本的な制度として、大いに参考にした施策であった。隣組には、「住民管理」、つまり組長を通じて地域社会への人の流入を把握して人口動態を管理し、成員たちの日常の動向を相互監視するためのメカニズムが巧みに備わっていたのである。それはスハルトの権威主義体制を支え、政治的安定を作り出すのに寄与した。著者も、終章でそのことに触れているが、残念なことにはわずか2ページしか割かれていない。著者は、これまで独立後の隣保組織についても多くの優れた論考を発表している。しかしその成果が本研究ではほとんど反映されていない。

最後にもう一つ問題を指摘すると、隣組に関する先行研究の紹介がないのは残念である。実際には評者が知る限りにおいても、日本やアメリカで数件は関連論文が出版されているが、それに関しては言及がない。たとえ内容がとるに足らないものだと判断したとしても、また視点が異なるにせよ、隣組を題材にしている以上は、その評価を付して言及してほしかった。

以上日本の書評の慣習を破って、かなり辛口になってしまった。専門が近い人間が書評するととかく辛口になってしまいがちなことをお許しいただきたい。しかし、上記のコメントの一部はなものねだりであり、もちろん全体としてこの大作の意義を損なうものではないことをあらためて申し上げたい。隣組ならびにその周辺の課題に関する綿密な情報をかくも多く紹介したというだけでも十二分に評価されるべきことである。新史料も数多く発掘している。それは長い年月をかけて行われた血の滲むようなライブラリーワークの結晶であり、心から脱帽したい。それだけにこのゴトン・ロヨン論議だけに終始させるのはいささか残念であるので、ぜひ今後さらなる視点から論議

を發展させていただきたいと切に望むものである。
(倉沢愛子・慶應義塾大学名誉教授)

林 行夫(編著)、『日本と東南アジアの仏教交流——その史実と展望——』(龍谷大学仏教文化研究叢書 42) 三人社, 2022, 244p.

本書は、龍谷大学世界仏教文化研究センター仏教史・真宗史総合研究班による、「日本と東南アジアの仏教交流」(2017～2020年度)で行われた12回の研究集会(16の報告)をもとに、報告者の内の8名による執筆で構成されている。

編者による「はしがき」では、日本と上座仏教圏における、長年にわたって折り重なる様々なすれ違いが指摘されている。例えば、戦前からの日本におけるアジア諸国蔑視や未開視、日本仏教優位の立場から理解され、時に軽視・黙殺されてきた上座仏教。また上座仏教研究の知見自体も、地域研究や人類学的研究の内部において深められてきたが、日本仏教やその研究と十分な形で接続されてはいない点。本書は、そういったすれ違いから一歩先に進むため、近年新たに見つかった資料を踏まえつつ、先述の研究集会の成果をまとめたものである。

この「はしがき」の端々には、先のすれ違いに対する、静かな怒りや哀しみのような重苦しさを感じられる。ただし、本書全体を読み通してみると、すれ違いの狭間に差し込む、幾筋かのきらめきも見えてくる。

以下、まずは各章の紹介を行い、それぞれに評者の簡単なコメントを付してみたい。(なお本書評では上座部仏教と上座仏教といった2種の表記が混在しているが、はしがき・各章の要約では著者の用語選択を尊重しそれに合わせ、評者の意見等については上座部仏教を用いている。)

第1章の村上忠良「仏教交流の実相への視座——タイと日本の関係より」では、日本と東南アジアの仏教における諸関係を「交流」という言葉で表現することの安易さを指摘し、きめ細かな諸関係を捉えようとする。著者は、日本の新宗教のタイ布教における「葛藤」を前提とした「寄り添

い」と「ずらし」の実践を足がかりにし、「同じ」仏教だから「交流」しうるとか、教派や教団の立場での「大きな物語」の「交流」に注目する立場を取らない。代わりにタイで一時出家した研究者やジャーナリスト、タイで長期出家を経験している日本人僧侶、タイにおける日本の新宗教に着目し、そこで紡がれる「小さな物語」、「違い」を越境しつつも物語形成までには至らない無数の「断片的エピソード」としての「交流」、そしてそれらが連鎖していくことを、『『新しい』ものを生み出す動態の兆し』として指摘する。評者としては、本稿が示した視点がインタビュー等により、濃密な記述と深い議論として展開されることを期待する。

第2章の伊東利勝「日本とミャンマーの仏教交流——『入竺比丘尼』に見るネーションとジェンダー」は、浄土宗務所の助成により1926年1月から1928年3月にインド・セイロン・ビルマを訪れた尼僧の村上妙清に注目し、その体験記『入竺比丘尼』(1944)における近代的国家・民族アイデンティティに強く影響を受けた教義交流の(閉ざされた)様子を描いている。自身を比丘尼として捉えていた村上は、ビルマやセイロンにおいて、正式の比丘尼とはみなされず(そもそも当時の上座部仏教では比丘尼の伝統は途絶えており、日本仏教には出家者を規定する律が欠けている)、比丘とは異なってあまり敬意を示す対象とはされない尼僧として扱われた。村上はそこに律を欠いた日本の大乘仏教や、男性優位の日本仏教界への問題を感じつつも、現地における比丘尼不在は、気概の不足した現地の尼僧の精神性(その根底にある民族性)に原因があるのだという視点にすり替えてしまう。著者は「こうしたアプローチは現在も変わっていない」(p.57)と述べるが、評者としてはやや性急な判断に感じる。指摘された問題があることを評者も同意するが、他方で現代の日本仏教の実情や実践者の多様性も考慮する必要があるかと思う。また著名な学僧でもない村上に、教義的な乗り越えを期待するのは荷が勝ちすぎではないだろうか。

第3章の大澤広嗣「仏教学者の上田天瑞と陸軍中将の牟田口廉也——インパール作戦の開始前後における会見」は、戦時中にビルマに滞在し上座

部仏教僧として得度経験を持った仏教学者の上田天瑞の略歴や南方留学の様子、インパール作戦を率いた陸軍中将の牟田口廉也とのつながりを取り上げている。新史料とその発見経緯などの紹介もある。ただし、本稿は「上田のビルマ関係史料に関する序論」(p.66)にあたるものであり、十分な分析がなされているわけではない。評者としては、上田と牟田口や軍との関わりだけでなく、上田のビルマ仏教やビルマ人僧侶理解のあり方が気になった。日記の記述を一部見る限り、上田の牟田口への思いとビルマ人僧侶への思いには、温度差を感じる。急な異動でのビルマ滞在は2年間のみであり、帰国直前に90日間の出家経験を得たが、この限定的状況で、どの程度ビルマ語ができ(通訳利用のみ?)、ビルマ仏教の何をどう理解したのだろうか。そういった点から上田の著作を読みなおす必要があるのではないかな。

第4章の中西直樹「明治期日本人僧侶の暹羅布教」では、明治期の暹羅(シャム)つまりタイ国への日本人僧侶の布教に関する関係資料の翻刻と、武田恵教(真宗大谷派)、宮本英龍(本願寺派)、概旭乗(浄土宗)の暹羅布教の経緯の記述がなされている。武田は南清(清の福建省など)での布教の失敗後に、当時200万人を超えていたタイの清国人(中国系移民)の要請を受けて暹羅布教に転進する。しかし暹羅側の疑念もあり布教は難航し、朝鮮北部布教へと進路を変えている。宮本も同様に南清での布教がうまくいかず、暹羅布教に活路を見だし、在留邦人や清国人や現地人への布教を試みたが2年弱で撤退した。概(およびその後水澤泰澄)が暹羅の数少ない在留邦人を対象に布教を行うが布教状況は不明となっている。このように暹羅での布教は、1907年から1908年までの約2年間に留まり、その後は、朝鮮・関東州での植民地経営の展開に伴い布教者たちはそちらに転進することになったと、著者は述べている。評者としては、タイの中国系移民と日本仏教の布教師との間に接点があったことが意外に思われた。一方で、民間信仰や少数の大乘仏教寺院など華人系宗教がタイに流入するものこの頃であり、上座部仏教とは異なった移民宗教のダイナミズムを感じた。

第5章の清水洋平「仏教經典をめぐる日タイ交流の史実と現実」は、タイにおける貝葉等の仏典写本が日本に渡来した経緯や、その内容、写本の研究上の価値などについて論じている。大谷大学が所蔵するタイの仏典写本を中心に、日本国内の他大学に所蔵されている写本についての情報を整理し、仏典寄贈の交流を捉えようとしている。また大谷大学所蔵のうちタイ王室寄贈のものについて、著者は従來說とは異なり、19世紀末にシャム（タイ）へ留学した真宗大谷派僧侶の生田（織田）得能が、1890年の帰国時に、当時の東本願寺法主の大谷光瑩へ受け渡しを託されたものではないかとの仮説を提示している。1888年に来日したシャム全権大使ブラヤー・パーサコーラウォンを法主が歓待し、ラーマ5世に法具等の贈り物をしたことへの返礼ではないかとの読みである。仮説自体も興味深いが、評者として気になったのは、タイの国家的慣例として仏典写本贈呈のプロトコルがあるのかどうかである。煌びやかな外装だけでなく、当時のタイでも徐々に読まれなくなっていたコーム文字の写本、中でも論蔵の註釈写本を中心に返礼品として送ってきた意味は何なのだろうか。またパーリ三蔵の印刷版が初めて刊行された（諸外国にも贈られた）のが1888年から1892年だが、仏典の質的意味合いが大きく変わるこの時期と何か関わりはあったのだろうか。

第6章の神田英昭「タイ仏教と日本仏教は対話できるか——タイ仏教への掛け橋になる」は、これまでの5つの論稿と異なり、日本仏教とタイ仏教の間の掛け橋となるような事例として、僧侶としての立場から自身の宗教的实践を紹介する。著者は、真言宗の僧侶でありつつ、タイで3年間、上座仏教の比丘として過ごした経験を持っている。バンコクの僧院ワット・ラージャブーラナ（通称ワット・リアップ）の境内にある日本人納骨堂の管理業務を兼ねた出家であった。帰国後に真言宗僧侶として活動しながら、日本人参加者を募って三泊四日のタイ仏教巡礼を企画し実行するようになる。本稿の後半はそのような巡礼企画の紹介となっている。そこでは、托鉢行への同行、無常の死生観が普通のこととして体験される葬式寺、現代的な瞑想部屋や活発な法話など多彩な催しが行

われるBIA（Buddhadasa Indapanno Archives、ブッタタート比丘¹⁾）を記念する資料館を兼ねた仏教施設）の訪問などが行われている。評者としては、日本仏教に今何が求められているのか、タイ仏教巡礼を通じて日本の人々が何を得たのかについても知りたいところである。

第7章の林行夫「石井米雄と日タイ仏教交流」では、東南アジア史研究・タイ上座仏教研究の発展に多大な貢献を果たした石井米雄を中心に、藤吉慈海や佐々木教悟などタイ仏教の研究にも携わった同時代の仏教学者、日本に留学し日本の暮らしや文化や宗教をタイに伝えたサティアン・パンタランシーなどの、研究における立ち位置なども取り上げている。石井は戦前生まれではあったものの、大乘仏教重視の理念的立場や、東南アジアを未開の国と位置付ける蔑視といった当時の風潮には取り込まれず、タイで出家の経験をもち、生身の人間の生活からタイ上座仏教を理解しようとした。そのため、大乘優位の立場からタイの仏教に接しようとする日本仏教の僧侶たちに嫌悪感を抱き、律を持たない日本仏教の僧侶に対しその存在様態の矛盾を批判的に捉えていたことが、エッセイや手稿をもとに明らかにされている。そして著者は「むすびにかえて」において、「わが国においてこの仏教は、仏教そのものにでなく世俗の評価や動向に自らの存在理由を求めることに奔走する。近代日本の宗派仏教の現実である」（p. 199）と述べている。評者としては、その発言の趣旨は理解できるが、いささか性急なステレオタイプ視にも感じるし、同様の批判的主張がタイ社会の中でサンガ批判に用いられることもあるのではないと思う。石井や著者の幾重にも重なる悲嘆を受け止めつつも、それをきめ細かく解きほぐし、さらに日本仏教（研究）についても人類学的・異文化研究的な視点で、生活の現場から理解していく先に、交流の兆しも見えてくるのではないだろうか。

1) ブッタタート比丘（1906-93）は、在家者における悟りへの実践や、社会参加仏教の思想基盤を提示するなど改革の思想を展開したタイ上座部仏教僧侶。他宗派・他宗教にも開かれた姿勢をとっていた。

第8章の藤本晃「仏教の交流、比丘サンガの交流」では、まず仏教交流の3つのレベルが定められている。第1に部派分裂などにみられる、「比丘サンガ」同士による同じ地域内の他者との交流、第2に上座仏教圏内の僧侶・国家の交流といった、各地域の同じ仏教同士の「仏教文化」の交流、第3に上座仏教と日本仏教の交流のような、「各地域の文化」レベルつまり仏教伝播地内における異なる仏教同士の交流である。とりわけ第3のケースが本稿の中心となっており、浄土真宗寺院の住職である著者自身が、スリランカ出身の上座仏教比丘スマナサーラ長老と出会い、自身の真宗寺院の活動に上座仏教的要素を取り込んでいるあり方を紹介している。このような交流的实践が可能となった背景として、スリランカ仏教やタイ仏教といった文化的特性を帯びた上座仏教を「脱文化」化し、日本人の思考や生活に合わせて教えを説くスマナサーラ長老の活動方式や、釈尊の教えがよくわからないという真宗寺院の檀家からの問い掛けへの著者の対応といったものがある。評者としては、こういった生活の現場からの地平の融合は、大きな運動ではないとしても、近年、あちこちに現れているのではないかと感じている。

本書の問い掛けと試みは、学問分野の越境、信仰実践の越境、慣習的实践の越境の可能性を示唆している。特に第6章や第8章に見られる、日本仏教や上座部仏教の僧侶による新たな試みなど近年の状況は示唆的であり、第1章で指摘されている「小さな物語」「断片的なエピソード」にも注目する必要があるだろう。そして何より本書自体が、長年のすれ違いとそれを越境する試みの産物でもある。今後は、本書で記された多層的で絡まり合った越境的関わり（交流）やすれ違いのイメージを解きほぐし、上座部仏教と日本仏教の双方における学的不いしは宗教的営みを、生活世界のレベルから丁寧に捉えて接点を見つけることが、課題となるのではないか。

(矢野秀武・駒澤大学総合教育研究部)

西 芳実、『夢みるインドネシア映画の挑戦』英明企画編集、2021、346+xixp.

本書を読み、ふと気づかされたことがある。まだ見ぬこれからを「夢」として語れる空間が、私たちのまわりからどれだけ失われてしまっているか。デジタルコンテンツやSNS、さらに生成AIの登場で、あらゆる国の情報や、そこに住む人びと自身が発信する書き込みにも私たちは自在にアクセスできるようになった。ただしそこにあるものの多くは、すでに見えるもの、または見せるためのものであり、「まだ見えないもの」ではない。まだ見えないもの、たとえば「夢」のビジョンを少しでも掴もうと、人はそれを誰かに語り、また聴いてもらっていたはずだった。失われてしまったのはそのような「夢語り」の空間のことである。

「夢みるインドネシア映画の挑戦」をタイトルとする本書は、1998年のスハルト政権崩壊から今日にかけて、民主化とともに成長してきたインドネシア映画を語る一冊である。取り上げられる200本余りの映画の舞台がタイトルごとに表示された国内外の詳細なマップや政治・文化史に対応した制作年度の年表のほか、インドネシア映画に関する新旧の学術的論考リストまでが収録された本書は、たとえばバリ島がインドネシアにあることを知らない読者にもインドネシアの文化や歴史について深い理解を促す解説の書であり、同時にインドネシアの文化史に関心を寄せる研究者にとっては精緻で有益な事典の趣を持つ。しかし本書はなによりも、時間をかけてなされた映画による語り、そこに向けられた真摯な傾聴の記録であるように思う。

本書の主題は、民主化とともに成長した映画というメディアが、インドネシアの過去の記憶や傷ついた理想にどのように向き合い、新たな「夢」として語り直すことに挑戦してきたかを読み解き、辿ることにある。1. 父（政府）・子（国民）関係の見直しと再構築 2. 規範意識や信仰をめぐる実践や意識の変容 3. 国民や地方の受難の掘り起こしとその共有という、以上3つのテーマを軸に作品の読み解きが展開する第2部以下を概観してみたい。